

『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』の 冰心佚文の可能性について ——「文化生活出版社」を手掛かりにして

虞 萍

はじめに

「文化生活出版社」は嘗て『文学叢刊』、『文化生活叢刊』、『訳文叢書』、『現代長篇小説叢書』、『現代生物学叢書』などの書籍を出版した。目下の研究結果によると、『文学叢刊』は、巴金（1904-2005）により編纂され、全10集で、計160冊¹、中国現代文学の出版史において一定の地位を得ている。しかし、現在『文学叢刊』として出版された160冊の書籍の中に、冰心の作品は一篇も収録されていない。

周知のように、巴金と冰心（1900-1999）は長年の親友であった²。1930年代初期、冰心は巴金の提案を受け入れて、『全集』を出版する決意をした。その時、出版社との交渉も巴金が手掛けていた。1932-1933年、『冰心全集』（1-3）が北新書局より出版され、冰心は中国近現代史において30歳代で『全集』を出版する初めての女性作家になった。とは言え、『文学叢刊』はおろか、1935年から1954年にかけて、文化生活出版社によって出版された図書の目録には、冰心の作品は一篇も見当たらない。

2005年、『冰心志』（福州市地方志編纂委員会編、海風出版社）は何の説明もなしに、冰心の『冬児姑娘』³（1937年5月）、『象牙之夢』⁴（1937年5月）、『愛的靈魂』⁵（1947年5月）、『愛神之火』⁶（1947年6月）を海賊版と分類した⁷。以下の論述を展開させる前、まずは「海賊版」と「偽作」の概念上の区別を確認したい。『大辞泉』によると、「海賊版」とは、「外国の著作物を著者・出版社の許可を受けずに複製したもの。同一国内のもの

についてもいう⁸。」一方、「偽作」とは、「一、本物に似せて作ること。特に、書画などを本来の作者の作品に見せかけて作ること。また、その作品。贋作。二、著作権者に無断で著作物の複製・発行などをすること⁹。」「海賊版」と「偽作」のこれらの意味に基づいて考えると、『冰心志』が表明したいのは、すでに1994年と1999年に卓如が編集し海峡文芸出版社によって出版された『冰心全集』に収録されている1937年の『冬児姑娘』は海賊版で、『冰心全集』（前掲。1994年、1999年版）に収録されていない、つまり、冰心作品と公認されていない『象牙之夢』、『愛的靈魂』と『愛神之火』は偽作である。しかし、『冰心全集』に収録されていないことを理由に、これらの作品を偽作と見なすことができるのであろうか。筆者はこのような安易な断定に疑問を抱いたため、日本でこれらの本について調べた。この4冊の本の著者欄には「冰心」と書いてあり、共に巴金主編の『文学叢刊』となっている。また、出版社は「文化生活出版社」、と表記されている。これらの作品は冰心佚文である可能性はないだろうか。今のところ、一つ断定できるのは、これらの作品が1950年代初期の国語関係の雑誌に「冰心」というペンネームを使用して文章を発表していた呉奔星¹⁰（1913-2004）の作品ではないということである¹¹。日本に現存している1937年5月出版の『冬児姑娘』には、「冬児姑娘」、「第一次宴会」、「人生」、「西風」、「斯人独憔悴」、「稚弱的心靈」、「魔女」という7篇の作品が収録されている。うち、「人生」、「稚弱的心靈」、「魔女」という3篇の内容は、『冰心全集』（前掲。1994年、1999年版）に収録されている「煩悶」（1922年）、「寂寞」（1922年）、「姑姑」（1929年）の作品内容とまったく同じである。では、冰心のこの3篇の作品は、1937年5月に出版された『冬児姑娘』に収録されたときに、なぜタイトルを「人生」、「稚弱的心靈」、「魔女」と改められたのか。この疑問については今のところまだ考証できていない。しかし、作家が自分の作品名を改めることは決して珍しくない。嘗て巴金も自分の作品名を改めている¹²。

さて、『冬児姑娘』とも関わって、本論は『冰心全集』（前掲。1994年、

1999年版)と冰心佚文集『我自己走過的路』(王炳根選編、人民文学出版社、2007年)に収録されていない『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』に焦点を置き、これらの作品が冰心佚文である可能性について考察したい。具体的には、これらの作品を出版した「文化生活出版社」について考察し、本出版社の創設者、主なる編集者、創設経緯・目的、具体的な規模などを究明したい。次に、対象をこれらの作品の発行人である「呉文林」に絞り、作品の出版時期および出版背景について分析したい。また、『文学叢刊』の主編である巴金と冰心の交流を結び付けて、『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』が冰心佚文である可能性について、探求したい。さらに、『冬児姑娘』、『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』の裏表紙にある「『文学叢刊』目録」を通して、論点をより一層深めたい。最後に、冰心が日本に滞在していた時期(1946-1951)に日本の研究者倉石武四郎(1897-1975)との間で行われた交流の側面から、『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』の日本の図書館における所蔵状況と関連付けて分析し、これらの作品を冰心佚文と判断することの信憑性を明らかにしたい。

一 「文化生活出版社」の創設経緯

前述したように、『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』は共に文化生活出版社によって出版された。そのため、本章ではまず文化生活出版社の創設経緯について整理する。

魯迅(1881-1936)は1935年の中国の出版事情を次のように指摘した。「今はすべての書店は以前よりもますます悪化した。彼らは手取り早く金儲けしたい以外は何も考えない。例え契約が済んでも、破棄したりします。」¹³「文化生活社」はこのような中国の出版事情の中で、同年5月、呉朗西(1904-1992)、伍禅(1904-1988)、郭安仁(麗尼、1909-1968)などの人によって、上海で設立された。巴金の記憶によると、「文化生活社」が設立されたばかりの時、魯迅から多大なる支持と庇護を得た¹⁴。巴金は同年8月に日本から上海に戻り、以来、この出版社で19年にわたって無償で働

き続けた。同年9月、「文化生活社」は「文化生活出版社」に改名された¹⁵。当時、文化生活出版社の主旨は「新文学創作を繁栄させること」で、呉朗西は社長を務め、巴金は総編集長を担当した。

2003年、前身を文化生活出版社と平明出版社とする上海文芸出版社¹⁶は、巴金の弟李濟生編著の『巴金与文化生活出版社』という本を出版した。この本の第51-83頁には、文化生活出版社が1935年から1954年にかけて出版した書籍の目録が公開されており、巴金主編の『文化生活叢刊』、『文学叢刊』（第1-10集）、『新時代小説叢刊』、『現代長篇小説叢書』、『文季叢書』、『文学小叢刊』（第1、2集）、『烽火小叢書』、靳以主編の『烽火文叢』、陸少懿と呉朗西編の『現代日本文学叢刊』、呉朗西編の『民主德国文芸訳叢』、豊華瞻訳、豊子愷挿絵の『格林姆童話』、フランスのジャックルクリュ著、鄭紹文訳、呉克剛校正の『総合史地叢書』、呉克剛編訳の『戦時経済叢書』および編集者不詳の『訳文叢刊』、『水星叢書』、『西窓小書』、『翻訳小文庫』、『契訶夫戯劇集』、『劇作家選集叢書』、『新文芸叢刊』（画冊）、『少年読物叢書』、『青年読物叢刊』、『少年科学叢書』、『現代科学小叢書』、『現代生物学叢書』（第1、2集）、『通俗小説名著訳叢』および一部販売されたそれ以外の書籍の名が列挙されている。しかし、冰心の作品はこれらの目録には収録されていない。

文化生活出版社の最初の出版物である『文化生活叢刊』を紹介するために出された広告では、呉朗西と巴金は『文化生活叢刊』の出版主旨を次のように表明している。「芸術哲学の奥深さは、ほんの一部の人しか知らない。普通の人には個人利益を重視し、公立図書館は古典を収集していることばかり自慢し、だれもが貧しい青年のことを助けようとしめない。多くの青年の需要はこのように軽視された。しかし、青年たちの知識を追究する欲望を減ぼすことはできない。彼らは困難と苦悩の境地で葛藤し、すべての善良な人は彼らのこのような知識に対する奮闘精神に感動し、涙を流す。我々はこのような心情で仕事に取り組んでいる。我々には大した能力がないが、野心は大きい。我々がこの叢刊を刊行するのは、長期的に努力して

大規模な文庫を作りたいからである。我々は特権階級から学問を取り戻して、万人に送り込みたい。我々はすべての人が、最も安い値段でその利益を享受できるようにしたい。』¹⁷ このような文芸出版の主旨は、1930、40年代の戦乱時期に置かれていた中国文化界では非常に斬新で、力があつた。また、『文学叢刊』は「新人を中心に、経験者が新人を誘導する」という方針を取ったため、魯迅、茅盾、王統照などの著名作家の作品以外に、曹禺、蕭紅、周文、沙汀、艾蕪、張天翼、何其芳、李広田などの1930年代に成長し始めた文壇新人の優秀な作品も数多く収録されていた。

1937年の「盧溝橋事件」がきっかけで始まった日中戦争は、中国を長期的な動乱状況に導かせた。多くの出版社は奥地に移転するしかなかった¹⁸。文化生活出版社も例外ではない。日本の帝国主義侵略者が上海を占領した後、巴金は広州で文化生活出版社の広州支社（住所は「広州恵福東路新東街20号」であった¹⁹）を設立し、「烽火社」と署名し、『烽火小叢書』、『烽火文叢』、『呐喊小叢書』、『呐喊文叢』など数多くの抗日戦争に関する救国冊子を出版した。1938年10月、広州は陥落したため、巴金は桂林に移り、文化生活出版社桂林支社（住所不詳）を創設させた。その後、桂林も陥落したため、呉朗西、巴金などの人は重慶に移り、文化生活出版社重慶支社（住所は「重慶民国路21号」。現在の「五一路174号」である²⁰）を設立し、成都に事務所を立ち上げた。

1942年は中国出版業の黄金時代と言われていた。しかし、その時期は短かった。1944年には、中国の物価が高騰したため、人々の購買力が日に日に落ちていた。書籍は生活必需品ではないため、大きな打撃を受けた。1944年5月13日の『大公報』（重慶）によると、「重慶市の出版業は日に日に不況になり、借金を返せなくなった。大半の出版社はすでに新書の印刷を止めて、外部への卸しも停まった。」1944年5月29日、『新華日報』は桂林の出版業について次のように報道した。「『文化城』と称されている桂林では、最近になって文化事業が非常に衰退した。一年前、毎月40種類以上の新書が出ていたが、今では半分あるいは半分未満しかならない。以前、すべて

の新書は初版のときに3,000冊以上印刷したが、今では、せいぜい1,500冊しか印刷しない。物価高騰、原価値上げ、資金減少、購買力低下、運輸困難、郵便代金値上げ、税金負担、出版審査が厳格になったなどの理由で、抗日戦争勝利前の出版業は圧迫された。各出版社は懸命に経営に努力した²¹。」

倪墨炎が指摘したように、文化生活出版社は決して大きな出版社ではない。一番隆盛の時期でも、編集部は10人未満であった。しかし、文化生活出版社から出版されたほとんどの本は生命力が溢れ、多くの本はいまだに再版され、文学史、翻訳史、専門史に収録されている²²。1945年、抗戦勝利以降、文化生活出版社の事務所は成都から上海に移転した。上海解放（1949年5月27日）前、文化生活出版社は株主総会と理事会を正式に設立し、会社組織に再編された。生物学者朱洗（1900-1962）は理事に選ばれて、巴金は総編集長を辞任し、作家業に専念するようになった。1955年、「文化生活出版社」は「上海新文芸出版社」に合併され、現在では「上海文芸出版社」と称されるようになった²³。

冰心の『冬児姑娘』、『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』の裏表紙には出版社を文化生活出版社と表記している。もしこの4冊の本が本当に文化生活出版社により出版された本であるなら、なぜ今まで文化生活出版社の書籍目録に収録されなかったのか。また、この4冊の本の裏表紙には、発行人を共に「呉文林」と明記しているが、「呉文林」とは一体どういう人物であろうか。次には、『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』の発行人、出版地などの事項を通して、これらの作品が冰心佚文である可能性を追及したい。

二 発行人「呉文林」について

『冬児姑娘』、『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』の裏表紙には、主編者は巴金で、発行人は「呉文林」と表記されている。では、「呉文林」は一体どんな人物であろうか。「呉文林」の正体について、巴金は次のよう

に述べている。「1935年5月、私は東京でツルゲーネフ（Ivan Sergeevich Turgenev）の『散文詩』を訳すことにした。当時、この仕事を半年で完成しようとしたが、しかし、どういうわけか、10首しか訳さないうちに辞めてしまった。いま振りかえて見ると、文化生活出版社の創設はその一つの原因となっている。しかし、これは私が文化生活出版社の創始者であるという意味ではない。違うのだ。私が帰国したとき、文化生活社の3冊目の本はすでにレイアウトされていた。私は文林兄の健闘精神と楽観的な態度に影響されたため、この苦しいが感謝はされない仕事に参入することを決めた。（『苦しいが感謝はされない』というのとは、決してこの仕事を軽視しているわけではない。ただ、我々のような人間がこの仕事を行うには実に『苦しいが感謝はされない』ことになる。他人にとっては、また別の話になる。）しかし、一旦参入すると（私は賛助者に過ぎないが）、足を引っ張られることになった。私自身の多くの仕事は中断してしまった。ツルゲーネフの『散文詩』の訳はその中の一つであろう。私は文化生活社から離れたかった。しかし、文林兄はいつも私に次のように言った。『文化出版社の基盤がしっかりできたら、私はあなたと一緒に離れるから。』²⁴ 巴金がこの文章の中で触れた「文林兄」とは「呉朗西」のことである。

呉朗西は1904年に四川省開県で生まれた。青年時代に日本に留学し、巴金のことを非常に尊重し、信頼していた。彼は文化生活出版社の社長兼編集者を担ったとき、巴金の仕事には一度も干渉したことがない、と李濟生は次のように指摘している。「あの頃の小さな出版社は、今日のように出版課題を選ぶわけではない。ましてや新聞に投稿し、討論することもない、すべては彼（巴金）の頭の中にある。彼は総編集長なので、彼の言う通りになる²⁵。」しかし、実際はそうではなかった。1950年3月、巴金は病気で、ベッドに横たわって、本を読むことしかできなかった。病中、文化生活出版社の当時の社長康嗣群はすでに呉朗西に追い出されて、呉朗西は社務委員会を設立し、主任委員と自ら命名した、ことを聞いた。巴金は、文化生活出版社のことは心配であるが、もう呉朗西とはかかわりたくない、と表

明した²⁶。巴金は1953年2月13日に「致田一文」の手紙で次のように述べている。「私も文化生活出版社を気にしているが、しかし私一人の力ではこの出版社を正当な道に向かわせることができない。(中略)私はもう呉朗西を相手にはできない。(中略)彼は書店を自分一人の手に握る権利はない。これは私たちみなが努力した結果です²⁷。」呉朗西が文化生活出版社の出版事業の衰退に負うべき責任を追及すると同時に、巴金は田一文に送った手紙に自分が文化生活出版社のスタッフを団結させることができなかった、と何回も反省していた²⁸。「生命を社会に捧げ、人民に捧げる」ことは巴金一生の希望であるため、彼は呉朗西との個人的な恩讐には囚われないことにした²⁹。24日、巴金は文化生活出版社の董事職務を形式的に辞任した³⁰。のちに文化生活出版社にはこれらの問題を起き、それに総編集者を担った巴金はずっと無報酬であったが、しかし文化生活出版社が設立された当初、巴金は出版内容をほぼ自分の思い通りにすることができた。

巴金と冰心は長年にわたって親密に交流した。では、文化生活出版社の総編集者として『文学叢刊』を自ら編集した巴金は、冰心の『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』を編集し、出版させた可能性はあるだろうか。『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』は1930、40年代に出版されているため、次に、巴金と冰心の1930、40年代の交流を中心に、これらの作品が冰心佚文である可能性をさらに分析し、検討したい。

三 文化生活出版社の総編集者である巴金と冰心の交流——1930、40年代を中心に

周知の通り、巴金と冰心は親友であった。巴金は冰心を非常に尊敬し、嘗て冰心のことを次のように評価していた。「冰心姉さんの存在自体は巨大な力になる。彼女は明るい灯で、私の前の道路を照らしてくれている。灯が明るいので、私は安心して邁進することができる³¹。」福建省長樂市にある冰心文学館の展覧館の正門に、巴金が冰心に送ったこの書が掛けられている。巴金と冰心はわずか4歳違いであるが、しかし、巴金にとって、冰

心は永遠に彼の敬愛する「姉」であった。

「五四」運動は当時19歳の大学生であった冰心を文壇に導かせた。彼女は始終「愛の旗」を揚げ、人々を鼓舞し、彼らが生活を愛し、生命を大切に、向上できるような作品を創作し続けた。1923年5月、巴金は成都の家を離れ、船に乗って重慶に向かった。途中、彼は瀘県で船を降り、商務印書館より出版された冰心の小詩集『繁星』を購入した。巴金は嘗て冰心の『繁星』について次のように追憶している。「当時、若い読者は青年作者の気持ちをよく理解していた。私たちは冰心が好きで、彼女を見習って、星と海を愛していた。私のような寂しい子供は彼女の作品を通して、温かさと母性愛を感じるようになった。家から離れたあの夏、庭の蝉の鳴き声が絶えなくて、私は従兄と一緒に『繁星』を読みながら、『小詩』を書いてみた。十首あまりの小詩しか書いたことがないが、冰心のこれらの小詩は今日になっても依然として私の心に鮮明に刻まれている。私は詩人ではない。しかし、いつも私の前に誰かが詩を吟じながら歩いていると思うと、知らず知らずのうちに自分も詩を吟じながら、ゆっくりと前へ進むようになった³²。」

1930年代初期、冰心作品の海賊版が中国に蔓延していた³³。当時、巴金はこのことを非常に心配し、冰心に『全集』の出版を勧めた。序の中触れたように、冰心は巴金のこの提案を素直に受け入れて、1932-1933年に『冰心全集』を北新書局より出版した。

1933年、章勒以（1909-1959）は北平（現在の北京：虞注）で『文学季刊』を創設した。当時、巴金は留学先のフランスから帰国したばかりであったが、『文学季刊』の編集に協力した。冰心、周作人、朱自清などの人はこの雑誌の編集委員に就任した。1933年初夏のある朝、巴金は『文学季刊』の編集者として、親友である章勒以と一緒に冰心の家を初訪問した。それ以降、巴金と冰心の交流はより一層親密になった。

巴金は1938年7月16日に「做一个战士」（雑文）を書き、9月1日に『少年読物』（半月刊創刊特大号）で掲載した。この文章の中で、彼は「今の時

代には、戦士が必要とされている。(中略) 戦士は『光明を追求し』、『永遠に若く』、『絶望と萎縮知らず』でなければならない。(中略) それにこれらの話で、彷徨って、煩悶している青年を激励しなければならない、と表明した。彼のこのような文学理念は冰心が提唱していた「愛の旗」と一致していた。

「盧溝橋事件」の影響で、1938年に冰心一家(夫呉文藻、息子呉平、長女呉冰、次女呉青)は雲南省昆明市郊外の呈貢県に引っ越した。当時、巴金は婚約者蕭珊(1917-1972)を連れて、何度も冰心の家に訪れた。

その後、冰心一家は重慶に移った。当時、冰心一家の生活は非常に苦しかった。冰心は「『關於女人』三版自序」の中で、次のように振りかえっている。「私はあの時——1940-1943年——経済的には確かに困っていた、原稿を売らなければならなかった(私たちは『關於女人』の最初の原稿料を使って、重慶市の「三六九」点心店で年越しの食事をした)³⁴。」冰心が重慶に引っ越した後、このような困窮した生活状況に直面していたことは、親友である巴金は十分に承知していた、と考えられる。それに、冰心の本を再版すべきと考え、その後冰心本人に委託されたため、1943年、巴金は北新書局より出版された『冰心全集』から一部の作品を選び、三冊の『冰心著作集』(それぞれは『冰心小説集』、『冰心詩集』、『冰心散文集』)を編集し、開明書店に出版してもらった³⁵。

1942年、巴金は冰心の作品が自分自身にもたらした影響について、再び懇ろに次のように言及した。「嘗て我々はみな寂しい子供であり、私たちは彼女(冰心:虞注)の作品の中から温かさを得て、慰められた。我々は星を愛し、海を愛することを知った。あの親しみ深くて、美しい文章から、嘗て失った母性愛を再び取り戻した。(私は『超人』の中の子供を覚えている。彼は母親を愛し、それに私たちに自分たちの母親を敬愛しようと呼びかけていた。世の中には母親を愛さない人は一人もいない。)今、私はあれらの作品が、生活するための勇気を与えてくれたかどうかは言えないが、しかし、私はランプの下で、窓外でしとしと降る雨音を聞きながら、我々

兄弟が本を読んだ後、顔を見合わせて微笑んだことを、今でも覚えている³⁶。』

1946年12月、冰心の夫呉文藻（1901-1985）は中国駐日本代表団政治組組長に就任した。1946年11月13日、冰心は次女呉青を連れて東京に向かった。以下表1と表2で示したように、来日後、冰心と巴金は手紙のやり取りをした。

表1 1947年5月8日、冰心が巴金に宛てて書いた手紙³⁷

巴金先生

手紙が届きました。飯塚君の手紙を付しますので、ご査収ください。

私は参政会³⁸に参加するために、一時帰国します。今月15日前後、上海に着く予定です。清閣³⁹に連絡してください。彼女は施高塔路四達里22号に住んでいます。

上海は相変わらず不景気です。頭が痛いですね。友達たちはみな元気ですか。よろしくお伝えください。ご無事であることを祈ります。

冰心拝上

五、八（1947年）

表2 1948年4月8日、冰心が巴金に宛てて書いた手紙⁴⁰

前略

巴金先生

あなたから贈られてきた本は、去年私が自分で持って戻ってきました。あなたからの12月17日の手紙に、今日になってようやく返事を書くなんて、本当に申し訳ございません（黄X生に書いた書字を同封しますので、渡してください）。生活が慌ただしくて、乱れている、それに気分も良くないので、手紙を書いても伝えたいことはありません。このような心情は普遍的なものだと思う、国内外の友人からの手紙の中で、うれ

しそうな人は一人もいません。どうしたらいいでしょう。あなたが計画していた長篇はもう書き始めていますか。私は家事とどうでもいいことに追われていますが、文藻は、今年は去年より元気になりました。子供たちも元気です（長女と次女は東京で、宗生は北平で勉強しています）。ここでは桜がちょうど咲いています。私は桜を好きでなくなりました。桜が私に残した印象とは薄い存在で、暗いイメージです。昨日我々は青山墓地と上野公園に行きました。日本人が酔っぱらって大泣きをしていました。

奥様と御子様によろしくお伝えください。

草々

冰心

四、八（1948年）

1989年7月、巴金は卓如著の『冰心伝』の序で次のように感嘆した。「冰心は『五四』文学運動の最後の元老であり、私はこの運動の産児である。」一方、冰心は終始巴金を自分の大切な弟と見なし、彼は「内気で、少し憂鬱気味で、寡黙である」、という印象を持っていた。

以上述べたように、巴金は冰心一家が苦境から脱却するように、1943年に『冰心著作集』を編集し出版させた以外に、文化生活出版社の総編集者として、彼は冰心のほかの作品を出版させた可能性はないだろうか。以下では『冬児姑娘』、『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』の裏表紙に列記された『文学叢刊』の目録を通して、冰心と文化生活出版社の関係を探りたい。

四 『冬児姑娘』、『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』の裏表紙に列記された『文学叢刊』の目録からの考察

姚福申によると、「文化生活出版社は優秀な中国の知識人を集め、文化界

にいた進歩的な人々の指示の下、1935年5月に成立し、1937年7月に起きた抗日戦争以来の2年間に、8種類の叢書、約百種類の文芸書籍と科学図書を出版した。1937年上半期まで、文化生活出版社はおよそ3日間に1冊の割合で新書を出版し、月の営業額は10,000元以上に上り、中国最大の出版社に匹敵することができた。中国の編集出版史に奇跡を起こした⁴¹。」もし姚福申の以上のような思い出が正確であれば、目下実証されている序の中で触れた文化生活出版社が出版した書籍以外、目録に入っていない他の本が存在している可能性も十分にある。

前述したように、1937年、抗日戦争が起きた後、北京が陥落し、冰心一家はやむをえず昆明に引っ越した。作者の署名が冰心となっている『冬児姑娘』と『象牙之夢』は共に1937年5月に文化生活出版社より初版された。当時中国が動乱の最中にあつたため、作者は自分たちの意志で作品を自由に発表することができなかった。作品が出版されたとしても、一部の作者の名前が出版社に変えられたり⁴²、また作品内容を勝手に削除されたりした作家もいた⁴³。文化生活出版社のスタッフも書籍の出版で頭を悩まされたに違いない。

『冬児姑娘』の出版地と印刷地は香港となっているが、しかし、前述したように、目下、文化生活出版社に関する書籍と研究には、上海、広州、桂林、重慶という4つの拠点しか記録されていない。では、文化生活出版社は香港で支社を設立した可能性はあつただろうか。『巴金年譜』には巴金が何度も香港に行った記録がある⁴⁴。確かに、巴金は戦乱から逃れるために、香港へ避難に行ったときもあつた。それに、当時友人蕭乾(1910-1999)は香港に滞在し⁴⁵、巴金は彼を訪ねたりもしていた。しかし、巴金が頻繁に香港を訪れた理由が、文化生活出版社の香港支社設立のためであつた、とは考えられないだろうか。作家の署名が冰心となっている『象牙之夢』の発行所の住所は「上海巨鹿路1弄8号」となっている。1947年5、6月、文化生活出版社は署名冰心である『愛的靈魂』と『愛神之火』を初版させ、発行所の住所はそれぞれ「上海巨鹿路1弄8号」と「重慶民国路145号」と

なっている。1946年から1947年にかけて、冰心は東京の麻布に駐在していた。表1で示したように、冰心は1947年5月8日の巴金宛ての手紙で日本から帰国することを伝えた。実際、1947年5月20日、冰心は南京で開催された国民参政会第四回第三次会議に参加するために帰国した。その後、南京、上海、天津と北平で講演した⁴⁶。作品『愛神之火』の最後には1947年5月に北平で脱稿した、と明記している。もしこの作品が本当に冰心の作品なら、彼女はこの講演会で北平に行ったときに脱稿した、と考えられる。また、脱稿から出版まではわずか一ヶ月しか掛からなかったことは、主編集者巴金の功績が大きいと思われる。

1930、40年代、中国では戦争が頻繁に起きていたため、「盧溝橋事件」以前に出版された『冬児姑娘』と『象牙之夢』はわずかの現存物しかない。前述した1937年5月に初版された『象牙之夢』以外、1945年9月に初版された版本もあった。その後、4年間も経たないうちに（1949年2月まで）すでに7版が出版された。とは言え、『象牙之夢』の現存物は少ない。『愛の靈魂』と『愛神之火』はそれぞれ1949年2月と3月に第4版と第6版が出版されたが、しかし保存された本は依然少なかった。このような状況が原因で、冰心のこれらの作品は長年知られないことになった、とも考えられる⁴⁷。筆者は最近日本でこれらの冰心と署名されている作品を発見した。

筆者が『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』は冰心佚文であると推測するもう一つの理由とは、『冬児姑娘』、『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』の裏表紙に、共に「『文学叢刊』目録」を印刷していることである（表3を参照されたい）。これらの目録には、冰心の『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』が共に収録されている。しかし、以下の目録は、孫晶の『文化生活出版社与現代文学』（広西教育出版社、1999年）と李濟生編著の『巴金与文化生活出版社』（上海文芸出版社、2003年）に収録されている160冊の『文学叢刊』目録とは一致していない。もし本章の冒頭に示した姚福申の追憶が正確であるならば、文化生活出版社が出版した書籍は、孫晶と李濟生の書籍に列挙されているものより多い可能性がある。

表3 『冬児姑娘』、『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』の裏表紙に列記された『『文学叢刊』目録』

作品名 (出版年)	『冬児姑娘』 (1937年)	『象牙之夢』 (1937年)	『愛的靈魂』 (1947年)	『愛神之火』 (1947年)	
裏表紙に明記されている冊数(冊)	36	40	42	42	
目録に実際に収録されている冊数(冊)	34	32	34	34	
共通の作品名 (全29冊)	巴金	『垂麗安娜』(短篇)、『愛底十字架』(短篇) ⁴⁸ 、『憶』(短篇)、『龍・虎・狗』(散文)、『愛底摧殘』(短篇)、『雷』(短篇)、『將軍』(短篇)、『白鳥之歌』(短篇)、『月夜』(短篇)、『短簡』(書信)、『長生塔』(童話)、『砂丁』(中篇)、『髮的故事』(短篇)、『神・鬼・人』(短篇)、『還魂草』(短篇)、『小人小事』(短篇)、『馬賽底夜』(短篇)、『利娜』(中篇)、『遲開的薔薇』(中篇)			
	茅盾	『殘冬』(短篇)、『少女の心』(中篇)、『小城春秋』(短篇)、『微波』(短篇)、『牯嶺之秋』(中篇)、『印象・感想・回憶』(散文)、『白楊礼贊』(散文)			
	張天翼	『春風』(短篇)			
	魯迅	『夜記』(散文)			
	老舍	『開市大吉』(中篇)			
共通する作品 以外の作品名	冰心	『愛的靈魂』(短篇)、 『象牙之夢』(短篇)、 『愛神之火』(中篇)	『冬児姑娘』(短篇)、 『第一次宴会』(短篇)	『冬児姑娘』(短篇)、 『第一次宴会』(短篇)、 『象牙之夢』(短篇)、 『愛神之火』(中篇)	『冬児姑娘』(短篇)、 『第一次宴会』(短篇)、 『象牙之夢』(短篇)、 『愛的靈魂』(短篇)
	鳳子	『鸚鵡之恋』(短篇)	—— ⁴⁹	『鸚鵡之恋』(短篇)	『鸚鵡之恋』(短篇)
	茅盾	『中秋之夜』(短篇)	『鉄樹花』(短篇)	——	——

表3で示したように、『冬児姑娘』の裏表紙には36冊の『文学叢刊』があると書かれているが、しかし以上の目録でわかるように、この統計には誤りがあり、正確な数は34冊である。『象牙之夢』の裏表紙には40冊の『文学叢刊』があると書かれているが、実際には32冊しか挙げられていない。うち、共通作品以外の3冊の本が収録されている。それぞれは、冰心の『冬児姑娘』と『第一次宴会』および茅盾の短編『鉄樹花』である。『愛的靈魂』と『愛神之火』の裏表紙には42冊の『文学叢刊』があると書かれているが、実際には34冊しか挙げられていない。うち、共通作品以外の2冊の本が収録されている。それぞれは、冰心の『愛の靈魂』と『象牙之夢』である。

以上のように、目下、確認できる160冊以外の『文学叢刊』は25冊がある。それぞれは、巴金の『巫麗安娜』（短篇）、『愛底十字架』（短篇）⁵⁰、『愛底摧殘』（短篇）、『雷』（短篇）、『將軍』（短篇）、『白鳥之歌』（短篇）、『月夜』（短篇）、『還魂草』（短篇）、『馬賽底夜』（短篇）、『遲開的薔薇』（中篇）、茅盾の『殘冬』（短篇）、『少女的心』（中篇）、『小城春秋』（短篇）、『微波』（短篇）、『牯嶺之秋』（中篇）、『白楊礼贊』（散文）、老舍の『開市大吉』（中篇）、鳳子の『鸚鵡之恋』（短篇）、茅盾の『中秋之夜』（短篇）、『鉄樹花』（短篇）、冰心の『冬児姑娘』（短篇）、『第一次宴会』（短篇）、『象牙之夢』（短篇）、『愛的靈魂』（短篇）、『愛神之火』（中篇）である。以上列記した25冊の『文学叢刊』以外、表3で列記したその他の12部の作品は孫晶と李濟生の本に排列された160冊の『文学叢刊』の目録と重複している。それぞれは、巴金の『憶』（短篇）、『龍・虎・狗』（散文）、『短簡』（書信）、『長生塔』（童話）、『砂丁』（中篇）、『髮的故事』（短篇）、『神・鬼・人』（短篇）、『小人小事』（短篇）、『利娜』（中篇）、茅盾の『印象・感想・回憶』（散文）、張天翼の『春風』（短篇）、魯迅の『夜記』（散文）である。文化生活出版社は上海、広州、桂林、重慶に拠点を設置した以外、香港での設置も考えられる。もし文学生活出版社が本当に香港で作品を発行したことがあるなら、1937年に出版された冰心の『冬児姑娘』は海賊版ではない、と判断で

きるであろう。それによって、『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』も氷心佚文である、と推測することができる。また、この25冊の『文学叢刊』の中で、氷心の『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』以外はすべて各作家本人の作品であると認識されている。この意味から考えてみても、氷心の3篇の作品だけが偽作という可能性が低い。

写真1のように、九州大学図書館に収蔵されている『愛的靈魂』（写真2）の裏表紙の左上には、「贈呈」という印を押してある。それに、写真3のように、「目録」の右側のページには九州大学が『愛的靈魂』を収蔵したときに手続き上で押した印がある。そこには、「昭和28. 7. 9」となっている。いわゆる、「1943年7月9日」のところである。しかし、現時点、日本の「NACSIS Webcat」には、『愛的靈魂』は1947年5月に初版されたことになっている。もし、当時九州大学図書館が『愛的靈魂』に押した収蔵年月



写真1（筆者撮影。写真では不鮮明であるが、左上に「贈呈」という印が押されている。）



写真2 (筆者撮影)

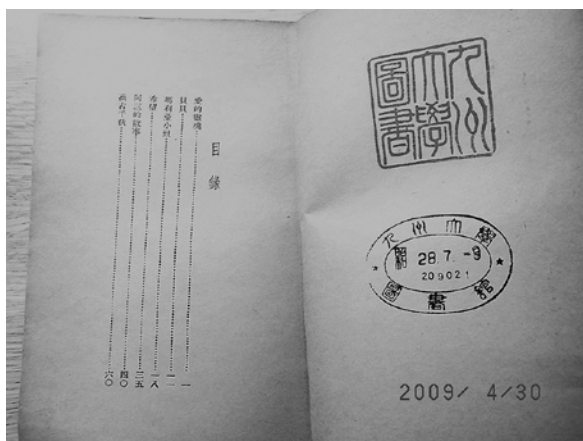


写真3 (筆者撮影)

は間違っていなければ、『愛の靈魂』は1947年版より前にも出版されたことがある、と考えられる。

と同時に、東京大学東洋文化研究所の「倉石文庫」⁵¹には『象牙之夢』と『愛神之火』が収録されている。この2冊の本の表紙には共に「贈呈」とい

う印が押してある⁵²。倉石武四郎は嘗て冰心の『中国文学をどう鑑賞するか』（大日本雄弁講談社、1949年9月）を和訳した。それに、倉石はこの本の「序」に次のように書いている。「以前日本人学生に中国新文学作品を選んだときに偶然冰心の小説『寂寞』を発見した。その後、冰心の『幼き読者へ』に出会ったとき、これこそ日本人に紹介せねばならない文献だと考え、すぐ翻訳をくわだてた。」その時から、倉石は冰心作品の忠実な読者と訳者になった。1940-1957年の間、倉石は冰心の一連の作品を翻訳した⁵³。倉石は冰心を日本に紹介した最大の貢献者であると言っても過言ではない⁵⁴。それと共に、1949年、倉石は冰心を東京大学に講師として招聘した。冰心は1951年8月中国に戻るまで東京大学で日本人の学生に中国文学に関する知識を伝授した。そのため、冰心と倉石の交流は非常に深い、と考えられる。冰心は日本語が話せないため、東京大学で講義するとき当時倉石の学生であった竹内実（1923- ）に通訳をしてもらった。中国語学研究者である倉石にとって冰心との中国語での交流はさほど問題がないであろう。倉石本人が冰心の『象牙之夢』と『愛神之火』を収蔵していたことから、この2冊の本は偽作である可能性が低い、と考えられる。この2冊の本は、冰心が滞日していたときに倉石に贈ったのであろうか、或いは文化生活出版社が倉石に贈ったのであろうか。目下、このことについてはまだ解明できない。しかし、倉石と冰心の長年の交流から考えると、「倉石文庫」に収録されている『象牙之夢』と『愛神之火』は冰心佚文である可能性が十分にある、と考えられる。

結論

目下、筆者が調査したところ、巴金主編した『文学叢刊』は、孫晶著の『文化生活出版社与現代文学』（前掲）と李濟生編著の『巴金与文化生活出版社』（前掲）に列挙された『文学叢刊目録』に掲示された160冊の本以外、少なくとも25冊がある。

冰心は1980年8月31日に次のように回想している。「1966年9月初め、私

が書いた数冊の本はみな紅衛兵に持って行かれて、『審査』された。これらの本は未だに返してもらっていない。私の手元にあるこの『関於女人』ですら、巴金氏が上海の古本露店で見つけてくれたのである⁵⁵。『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』は冰心がここで言う数冊の本の一部である可能性はないだろうか。

本論で論じた『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』という3冊の本は冰心佚文である可能性が高いこと以外、『小雪』⁵⁶（1960年）、『人生』⁵⁷（出版年不詳）、『霧夜』⁵⁸（出版年不詳）も冰心佚文の可能性もある。表4はこの3冊の本に関する具体的な事項を挙げたものである。これらの本は共に香港で出版された。冰心の『小雪』以外、文利出版社は、沈從文の『春燈集』（1960年）、『湘行散記』（1960年）、『長河』（1960年）、『邊城』（1960年）、『從文自伝』（1960年）、信定瀧太郎著、謝芳枝編訳の『中国薬酒浸法九十種』（出版年不詳）、老舎の『惶惑』（1945年）、『四世同堂』（出版年不詳）、『偷生』（出版年不詳）、を出版したことがある。沈從文と老舎のこれらの作品が海賊版ではないため、同じ出版社によって出版された冰心の『小雪』のみが偽作である可能性が低い、と考えられる。また、冰心の『西風』、『人生』、『霧夜』を出版した南華書店は、張天翼の『浮雲』（1966年）、『春風』（出版年不詳）、巴金の『夢景』（1934年）、『月夜』（1935年）、『幸福』（1935年）、『春雨』（1935年）、『晨星』（1935年）、『窗外』（1936年）、『長生塔』（1937年）、『家』『憩園』及其他』（出版年不詳）、『短簡』（出版年不詳）、茅盾の『青春的夢』（1960年）、『朝露』（1974年）、『少女的心』（出版年不詳）、『風波』（出版年不詳）、『紅葉』（出版年不詳）、老舎の『趕集』（1934年）、『老舎小説集』（1946年）、『駱駝祥子』（出版年不詳）、『牛天賜伝』（出版年不詳）、嵯起鳳編の『世界民間故事』（出版年不詳）を出版した⁵⁹。同じく、張天翼、巴金、茅盾、老舎のこれらの作品が海賊版ではないため、同じ出版社によって出版された冰心の『西風』（出版年不詳）、『人生』（出版年不詳）、『霧夜』（出版年不詳）のみが偽作である可能性が低い、と考えられる。以上の作品以外、南華書店は『暮春』（1966年）も出版し

表4 『小雪』、『人生』、『霧夜』について

作品名	『小雪』 (全10章)	『小雪』の別名 『陽光底下』	『人生』	『霧夜』
出版年月	1960年10月	1961年10月	不詳	不詳
出版者 (住所)	—— ⁶⁰	万国書店 (九龍偉晴街 四十八号四樓)	南華書店 (九龍偉晴街八十一号)	
発行者 (住所)	文利出版社 (香港荷李活道 166号)	——	——	
印刷者 (住所)	嶺南印刷公司	朗文印刷所 (香港渣華道 一一零号)	大衆印刷公司 (香港英皇道九四七号)	
販売者 (住所)	——	香港嶺南出版 社(九龍偉晴街 四十八号)	——	
説明	港九および南 洋の各書店で 販売。 著作権あり・ 複製禁止	——	——	
目録・ 収録されて いる作品名	第一章 一個窮読書人 第二章 老画師 第三章 俏女媽 第四章 三角恋愛同盟 第五章 小友 第六章 錢欲和色欲 第七章 兵 第八章 父子 第九章 兩種夫妻的結果 第十章 尾声	一 安蒂的童年 二 優秀的小姑娘 三 她開始流浪 四 孀婦的抑郁 五 冲出了同性恋愛的圈子 六 揭開了心底秘密 七 告密的婦人 八 不敢公開的約會 九 瀑布前的情話 十 多事的保長 十一 求婚 十二 又出来一個不幸的女人 十三 曾三小姐的朋友 十四 貞操是怎樣送掉的 十五 做了一次太太 十六 究竟是誰的罪惡 十七 一个最偉大婦人的死 十八 狂歡中的两个陰影 十九 遺棄的嬰兒 二十 理想的幻滅	「霧夜」 (別名「愛的靈 魂」)、 「貝貝」、 「瑪利亞小 姐」、「希望」、 「阿三的事 」、 「万古千秋」、 「離婚」 (別名「愛神之 火」)	
定価(香港 ドル)	一元二角		二元八角	一元五角

た。作者は冰心となっていたが、実は蘇雪林の『棘心』の間違いであった。表3で指摘したように、文化生活出版社も嘗て巴金の『愛底十字架』を冰心作品と誤って分列した。今のところ、南華書店の詳細は判明していないが、しかし、蘇雪林の『棘心』を冰心の『暮春』と誤って出版したからと言って、この出版社によって出版された本をすべて海賊版扱いで、排除することができない。以上の理由を含めて、筆者は『小雪』、『人生』、『霧夜』も冰心佚文の可能性があると推測する。

なお、冰心佚文の可能性が高い『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』、『小雪』、『人生』、『霧夜』の具体的な作品論は別稿で論ずることにする。

1 孫晶『文化生活出版社与現代文学』広西教育出版社、1999年、p.267-272。李濟生編著『巴金与文化生活出版社』上海文芸出版社、2003年、p.55-62。

2 2010年11月25日-12月12日、中国現代文学館、巴金研究会、冰心研究会、冰心文学館が主催した「巴金冰心世紀友情展」は北京の中国現代文学館で開催された。

3 『冬児姑娘』（巴金主編『文学叢刊』）文化生活出版社、1937年5月初版、1949年5月第11版。

4 『象牙之夢』（巴金主編『文学叢刊』）文化生活出版社、1937年5月。その後、1945年9月初版のものも出版され、1949年2月に第7版が出版されている。『象牙之夢』には、「象牙之夢」、「趕車」、「新的生命」、「夫唱婦隨」、「鬼域」、「螢火」が収録された。

5 『愛的靈魂』（巴金主編『文学叢刊』）文化生活出版社、1947年5月初版、1949年2月第4版。『愛的靈魂』には、「愛的靈魂」、「貝貝」、「瑪利亞小姐」、「希望」、「阿三的故事」、「万古千秋」が収録された。「愛的靈魂」の別名は「霧夜」であり、『霧夜』（南華書店、出版年不詳）に収録された。

6 『愛神之火』（巴金主編『文学叢刊』）文化生活出版社、1947年6月初版、1949年3月第6版。「愛神之火」の別名は「離婚」であり、『霧夜』（前掲）に収録された。

7 詳しい「海賊版」の目録は『冰心志』の「付録四『民国時期盜版、冒名冰心作品』」（p.268-271）を参照されたい。

8 小学館『大辞泉』編集部『大辞泉』小学館、1995年、p.439。

⁹ 『大辞泉』前掲、p.636。

¹⁰ 呉奔星（1913-2004）。詩人・学者・教授、湖南省安化県の出身である。北京師範大学国語科を卒業した。湖南農民運動、「一二・九」学生運動に参加した。1936年、李章伯と北平（現北京市：虞注）で『小雅詩刊』を創刊し、雑誌『現代』で「菜花詩刊」、「詩志」、「新詩月刊」などの詩を発表した。桂林師範学院、国立武漢大学、江蘇師範学院、南京師範学院等で研究員、教授を務めた。1957年、右派と見なされ、徐州師範学院で教鞭を執ることとなった。1982年、名誉回復され、南京師範大学文学部に戻った。

¹¹ 徐迺翔、欽鴻編『中国現代文学作者筆名録』（中国現代文学史資料匯編〈丙種〉）湖南文芸出版社、1988年、p.272。

¹² 1927年巴金が「沙哥（いわゆる薩珂）与凡宰特之死」（The Death of Sacco and Vanzetti、雑感）を発表し、佩竿と署名された。アメリカ州三藩市の『平等』月刊第1巻第4期に掲載された。1928年5月、上海自由書店によって出版された『革命的先駆』に収録されたとき、「薩珂与凡宰特之死」に改名された。その後、「薩珂与凡宰特之死」という題名で『断頭台上』に収録された。（唐金海、張曉雲主編『巴金年譜』〈上〉四川文芸出版社、1989年、p.156。）

¹³ 魯迅『魯迅全集』第12巻、人民文学出版社、1981年、p.582。

¹⁴ 陳思和、李輝「記文化生活出版社」『新文学史料』1982年第3期、1982年8月、p.198-209に詳しい。

¹⁵ 岩松久雄「文化生活出版社と〈文学叢刊〉」『熊本大学教養部紀要』（外国語・外国文学編）第27期、1992年1月、p.125-136。呉朗西「文化生活出版社の創建」『新文学史料』1982年第3期、1982年8月、p.195-197。〔日本語版〕呉朗西著、青谷政明訳「文化生活出版社の創立について」『中国研究月報』第402号、1981年8月、p.1-18。陳思和、李輝「記文化生活出版社」『新文学史料』1982年第3期、1982年8月、p.198-209。呉朗西「文化生活出版社的資金来源」『新文学史料』1982年第3期、1982年8月、p.209、p.144。『巴金年譜』〈上〉、前掲、p.390。

¹⁶ 巴金「上海文芸出版社三十年」（1982年5月27日作）初出は『大公報・大公園』（香港）1982年6月3、4日。底本は巴金『巴金全集』第16巻、人民文学出版社、1991年、p.411。

¹⁷ 『申報』1935年9月21日。

¹⁸ 呉永貴の「抗戦時期我国出版業の後方大転移」（『出版科学』2008年第2期〈第16巻〉、2008年3月、p.76-78）に詳しい。

¹⁹ 『巴金年譜』〈上〉前掲、p.487。

- ²⁰ 『巴金与文化生活出版社』（前掲）の写真1の文字説明を参照した。
- ²¹ 呉永貴、王静「抗戦時期大後方書刊出版概覧」『出版発行研究』2007年第7期、2007年7月、p.79。
- ²² 倪墨炎「発人深思的出版家：呉朗西」（『中華読書報』2001年4月4日）に詳しい。
- ²³ 「上海文芸出版社」の前身は「上海新文芸出版社」であり、郭沫若が主持した「群益出版社」、俞鴻模の「海燕書店」、任宗徳が主持した「大浮出版公司」により合併された。その後、巴金が主持した「平明出版社」と「文化生活出版社」が参入した。1952年6月1日、「上海文芸出版社」として正式に設立された。
- ²⁴ 巴金『『散文詩』後記』（1945年3月作）『巴金全集』第17巻、前掲、p.232。
- ²⁵ 李濟生「我所知道的文生社」『出版史料』1984年第3輯、1984年12月。
- ²⁶ 1950年4月10日の巴金が田一文に送った手紙による。（『巴金全集』第22巻、前掲、p.275-276。）巴金が田一文に送った手紙の保存経過は田一文の「關於巴金写給我的信」（『我憶巴金』四川文芸出版社、1989年、p.104-106）に詳しい。
- ²⁷ 『巴金全集』第22巻、前掲、p.281-282。
- ²⁸ 1950年7月22日、巴金が田一文に送った手紙に、田一文、采臣、陳暉をうまく団結させることができなかった。また他の友達をも団結させることができなかった、と書いていた。（『巴金全集』第22巻、前掲、p.278。）1954年4月9日、巴金が田一文に送った手紙に、文化生活出版社の前途を心配し、文化生活出版社の同僚たちを団結できなかったことを、自分自身に責めた。（『巴金全集』第22巻、前掲、p.282。）
- ²⁹ 李濟生「追思呉朗西」『新文学史料』2005年第3期、2005年8月、p.10。
- ³⁰ 『巴金年譜』（下）前掲、p.723。
- ³¹ 巴金「紀念冰心誕辰一百周年」（1990年5月20日作）葉書、2000年、6-2。
- ³² 巴金『『冰心伝』序』（1988年7月28日作）『巴金全集』第17巻、前掲、p.381-383。
- ³³ これについては拙著『冰心研究——女性・死・結婚』の第1章第2節（汲古書院、2010年、p.21-26）に詳しい。
- ³⁴ 冰心『『関于女人』三版自序』、初出は『関于女人』寧夏人民出版社、1980年12月。底本は卓如編『冰心全集』第7巻、海峡文芸出版社、1994年、p.204。
- ³⁵ 巴金『『冰心著作集』後記』『巴金全集』第17巻、前掲、p.340-341。
- ³⁶ 『『冰心著作集』後記』『巴金全集』第17巻、前掲、p.340-341。李朝全、凌璋清主編『世紀之交——冰心与巴金』團結出版社、1999年、p.2。

³⁷ 『冰心全集』第3巻、前掲、p.412。

³⁸ 「参政会」とは「国民参政会」のことであり、1937年3月-1948年3月、中華民国政府にある一つ民意調査を行う政治議論機構である。冰心は1941年から国民参政会に参加し、参政員に就任した。

³⁹ 趙清閣（1914-1999）。女性劇作家・小説家、冰心の親友である。河南省信陽市の出身である。趙清閣の生涯と文芸生涯については、以下の論文に詳しい。徐霖恩「従来燕趙多奇女——憶女作家趙清閣」、高天星「我認知的趙清閣」、潘頌徳「懷念趙清閣先生」、陳学勇「紀念趙清閣先生」、張彥林「清流笛韻 翠閣花香——趙清閣其人其事」（『新文学史料』2003年第3期〈総第100期〉、2003年8月、p.94-112）。劉和芳「与趙清閣先生的一面之縁」『黄河文学』2006年第4期、2006年4月。陳学勇「『趙清閣文芸生涯年譜』補正」『中国現代文学研究叢刊』1996年第3期、1996年9月、p.293-297。

⁴⁰ 『冰心全集』第3巻、前掲、p.442。

⁴¹ 姚福申「深得魯迅先生晚年信任的出版家吳朗西」『中国編輯』2006年第1期、2006年1月。中国論文引擎網 <http://www.yaocu.com/huijilun/200807/26-248631.shtml>（2010年11月15日最終確認）。

⁴² 例えば、1931年4月、北新書局が阿英（錢杏邨）の『現代中国女作家』を出版したとき、著者の名前を勝手に「黄英」に改名した。阿英はこのこと到大変不満を覚えた。（阿英『阿英文集』〈下〉生活・読書・新知三聯書店、1979年、p.899。）

⁴³ 1935年8月、巴金は第一出版社が出版した『巴金自伝』を見てとても不満であった。彼は次のように言った。「誤字が多くて、価格が高いことに加え、私の原稿より一章分少ない。審査会によって削除されたからだ。」ちなみに、削除された一章は「信仰与活動」であった。（『巴金年譜』〈上〉、前掲、p.392。）

⁴⁴ 1938年7月16日、巴金は上海から太古船に乗って広州へ向かい、20日に香港に到着した。道中、巴金は「香港行」という通信を書いた。20、21日、章靳以と香港で宿泊した。（『巴金年譜』〈上〉前掲、p.494-495。）同年10月中旬、広州が攻撃されたため、巴金は香港に頻繁に出入りした。（初出は葉中敏「巴金談写作与生活」『大公報』〈香港〉1984年10月18日。底本は『巴金年譜』〈上〉前掲、p.506。）

⁴⁵ 1939年6月、巴金は香港に行き、蕭乾のところに預けた服箱を取りに行った。（『巴金年譜』〈上〉前掲、p.526。）

⁴⁶ 冰心が日本から一時帰国し、中国各地での講演状況については『冰心研究——女性・死・結婚』（前掲）の第2章第3節（p.58-69）を参照されたい。

47 中国における冰心研究は1940-1978年には「低迷期」に陥っていた。一方、日本における冰心研究はより少なかった。1990年代以降、関西大学名誉教授萩野脩二が代表とする数名の冰心研究が現れたが、しかし冰心研究は日本では依然として重視されていない。一部の学者は冰心研究を軽視している。これらのことに関しては、『冰心研究——女性・死・結婚』（前掲）の第1、2章（p.12-92）を参照されたい。

48 『冬児姑娘』の裏表紙に列挙された『文学叢刊』の目録は、『愛底十字架』を冰心作品と分列したが、巴金作品の誤りである。

49 ここには作品がない。以下同。

50 『冬児姑娘』の封底に列出された『文学叢刊』の目録は、『愛底十字架』を冰心作品と分列したが、巴金作品の誤りである。

51 「倉石文庫」とは、倉石武四郎文庫のことを指す：虞注。

52 この2冊の表紙に押されている「贈呈」という印について、筆者は東京大学東洋文化研究所に問い合わせたことがある。先方の話によると、本にある「贈呈」という印は図書館が押したのではなく、「倉石文庫」がこの2冊の本を収蔵したときから、「贈呈」の2文字がすでにあったという。

53 倉石が翻訳した冰心作品は以下の通りである。「寄小読者」（通訳1-29）（1923-1926）、「斯人独憔悴」（1919年）、「超人」（1921年）、「寂寞」（1922年）、「悟」（1924年）、「別後」（1924年）、「瘋人筆記」（1922年）、「怎樣欣賞中国文学」（1949年）、「詩人与政治」（1951年）、「冬児姑娘」（1933年）、「分」（1931年）、「相片」（1934年）、「張嫂」（1943年）、「再寄小読者」（1-4）（1942-1944）、「新年試筆」（1934年）、「繁星」（7、10、12、18、34、36、64、77、155〈1921年〉）、「春水」（12、15、23、24、27、44、50、59、68、70、76、87、94、112、146、158〈1922年〉）、「陶奇的暑期日記」（1956年）（翻訳の年代順である）。

54 詳細は拙稿「冰心的日本之旅与日本の冰心研究」（『中国現代文学叢刊』2009年第2期〈総第127期〉、2009年3月、p.108-124）、拙著『冰心研究——女性・死・結婚』（前掲、p.50-92）を参照されたい。

55 「『関于女人』三版自序」『冰心全集』第7巻、前掲、p.204。

56 冰心『小雪』文利出版社、1960年10月（全10章）。別名『陽光底下』万国書店、1961年10月。

57 冰心『人生』南華書店、出版年不詳。

58 冰心『霧夜』南華書店、出版年不詳。「霧夜」（別名「愛的靈魂」）、「貝貝」、「瑪利亜小姐」、「希望」、「阿三的故事」、「万古千秋」、「離婚」（別名「愛神之火」）が

収録されている。

⁵⁹ NACSIS Webcatを参照した。

⁶⁰ ここには具体的な説明がない。以下同。